

地域資料叢書 21

土佐中東部の荘園故地を歩く

—第2分冊：介良庄・片山庄・朝倉庄調查研究報告書—



奥四万十山の暮らし調査団編

目次（第2分冊）

第3部 地域資源地図の世界

神秘の扉、伝説の扉（矢野恵）	3
物部の屋号地図（楠瀬慶太）	6
猿押～神峯 安芸・安田境界の尾根（森下嘉晴）	9

第4部 中東部荘園故地の諸相

中世・吸江庵領の歴史的景観一介良庄・片山庄・吾川山庄故地の現地調査（楠瀬慶太）	13
源希義誅殺の地と介良庄ー『吾妻鏡』寿永元年九月廿五日条記述について（福岡彰徳）	32
上杉和彦氏著「中世土佐地域史論の諸前提」の検討（福岡彰徳）	47
慶雲三年「五カ国一十九社。始入祈年幣帛例」に関する小考（福岡彰徳）	51
鷹場にまつわる罪と罰ー17世紀前半における土佐中東部の事例からー（石畑匡基）	55
朝倉庄故地を歩くー高知大学周辺の歴史と暮らしー（楠瀬慶太）	58
朝倉地区の現地調査と地域資源地図（楠瀬慶太・高知大学『現代日本語論Ⅲ』受講生）	66
土佐東部の荘園と港湾形成（原田英祐）	102
執筆者紹介	107

第3部 地域資源地図の世界

神秘の扉、伝説の扉

矢野 恵

はじめに

「神秘の扉」・「伝説の扉」とは、香美市物部町（旧物部村）を紹介するパンフレットである。これまで物部を紹介するパンフレットといえば、別府峡の紅葉や田舎料理の紹介といったような内容が多かった。物部に実際に住んでみると、自然や景観、食文化だけでなく、様々な歴史背景や、奥深い文化を持っていることが分かった。そこで、歴史・文化的にも唯一無二な物部について、もっと違った視点から魅力を伝えるべく、これらのパンフレット制作にあたった。また物部在住の方々に、物部の特徴を訪ねると「物部には何もない」と謙遜されることが多かった。そこで物部の歴史や文化などの地域資源を、地域の住民の方々にも改めて認識してもらいたいと思った。

神秘の扉

物部町は、東西に流れる川に沿って、もともと南北に分かれていた。北側に位置するのが、上^{かみにろう}葦生村、南側に位置するのが^{まきやま}槇山村である。昭和 31 年に合併して物部村になったが、今でもそれぞれで異なった風土が残っているのが興味深い。

槇山地域の方は、山が急峻で、奥地に行くにつれ、家々が山にへばりつくように点在している。最奥の集落、別府が陰陽道などの複合的宗教が混在した信仰体系「いざなぎ流」発祥の地といわれているように、神秘的な地域に感じたため、パンフレットの名称を「神秘の扉」とした。この「神秘の扉」では、「風景・自然」、「暮らし・食文化」、「いざなぎ流」、「伝説地図」の 카테고リーに分け、項目や説明文は物部の方の聞き取りや、文献、資料を元に作成した。ビジュアルにインパクトがあるものが多いので、写真を多く使い、分かりやすい説明を心がけた。

伝説の扉

上葦生地域は、槇山よりは山が平坦で棚田が広がる地域もある。物部町^{かみいけ}神池にある大蛇伝説で名所となっている^{おいけ}男池・^{めいけ}女池や、平家伝説などがあるため「伝説の扉」とした。「伝説の扉」では、「風景・自然」、「暮らし・食文化」、「踊り」、「伝説地図」の 카테고リーに分け、こちらも聞き取りや文献等を元に作成した。

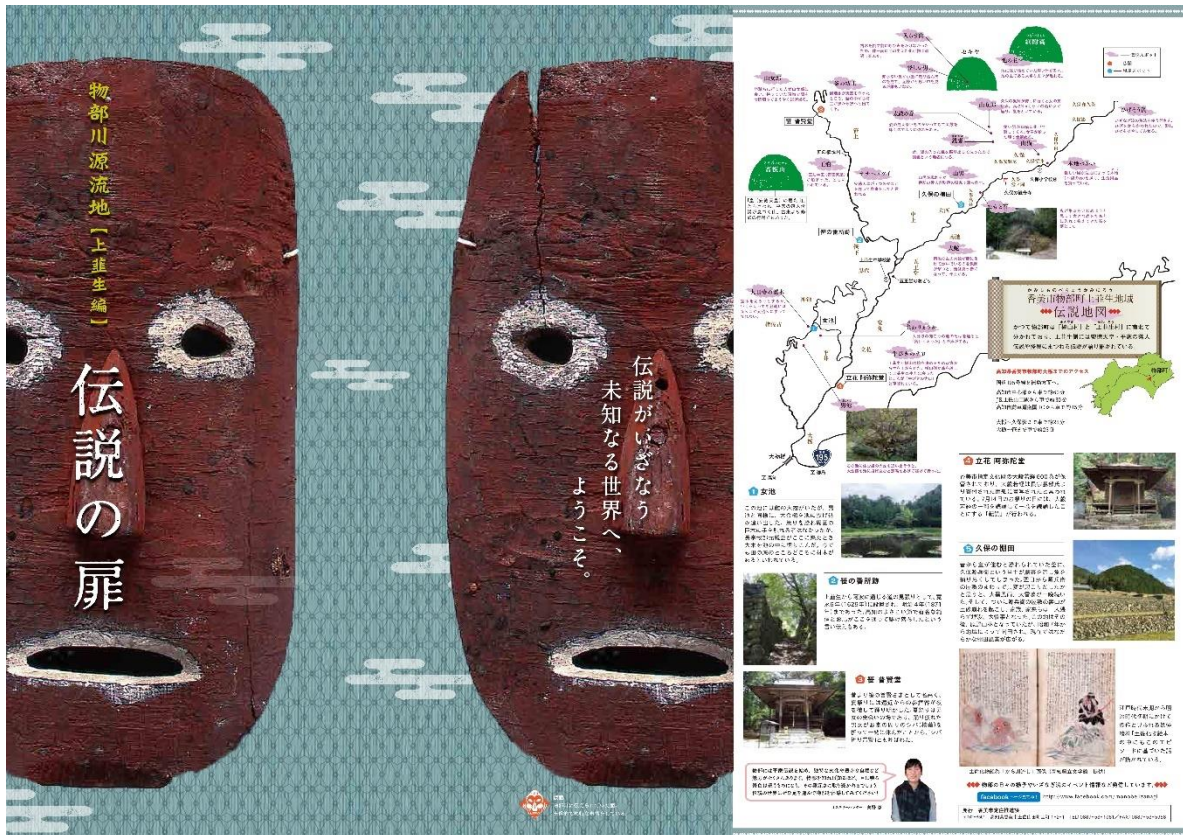
なお、このパンフレットを見て、物部に興味を持ち実際に訪れていただきたいとも考えていたため、行きやすいところを地図中に示している。「伝説地図」は伝説の云われのある場所を示しているので、実際に足を運んで伝説に思いをめぐらせていただきたいと思う。

さいごに

このパンフレットをきっかけに、多くの方に物部の知られざる魅力を知ってもらい、興味を持って物部を訪れていただきたい。また、地域の方々には自分たちの当たり前が、実はとても価値のあるものであるということを感じていただければ光栄である。

[illegible]

4



物部の屋号地図

楠瀬 慶太

屋号とは？

大学院で中世の荘園史研究に取り組んでいた 2007 年夏、筆者は現地調査で香美市物部町へ入った。古文書などに記された小地名の聞き取り調査を続ける中で、古老からほとんどの屋敷に屋号と呼ばれる名称があることを教えられた。屋号は「ムカイの一郎」、「カンジャ（鍛冶屋）の次郎」など、名字の変わりとして日常生活の中で使われていた。

屋号とは、かつて全国の集落で屋敷に付けられた名称である。民衆が名字を名乗れなかった江戸時代以前、集落内で互いを呼び分けるのに屋号が付けられたと言われている。物部では、室町時代の古文書や戦国末期の『長宗我部地検帳』に記された中世の屋号が現代まで使われていた。このことから屋号の成立は中世までさかのぼると考えている。例えば、『長宗我部地検帳』に記載される屋号「土居（どい）」は、谷沿いで水の便が良く、日当たりの良い場所にある場合が多い。中世に集落を開発した者が最初に住んだ屋敷であり、彼らは後に名主や庄屋となり、村の開発や運営の中心を担っていく。他にも中世の百姓名に由来する「依遠（よりとお）」、荘園の役人を指す「庄司（しょうじ）屋敷」など荘園制の名残を残す屋号が存在している¹⁾。

屋号地図とは？

屋号の名称や位置を地図上に記録する作業は、近現代の集落の暮らしの復元にもつながる。また、屋号が多く残る本県の中山間地域では、人口流出が著しく、集落の形が変貌している。無くなった屋敷や集落を、屋号という生活語彙や生活の記憶とともに記録することは、人々が数百年かけて培ってきた生活の知恵「民衆知」を、後世に伝えることにもつながるのである。県内ではこうした問題意識を持ち、自ら集落の屋号を地図に記録した人達がいる。地域資料叢書ではこの地図を「屋号地図」と呼び、地域資源地図²⁾の一種として解説を加えて紹介していきたいと考えている。

【註】

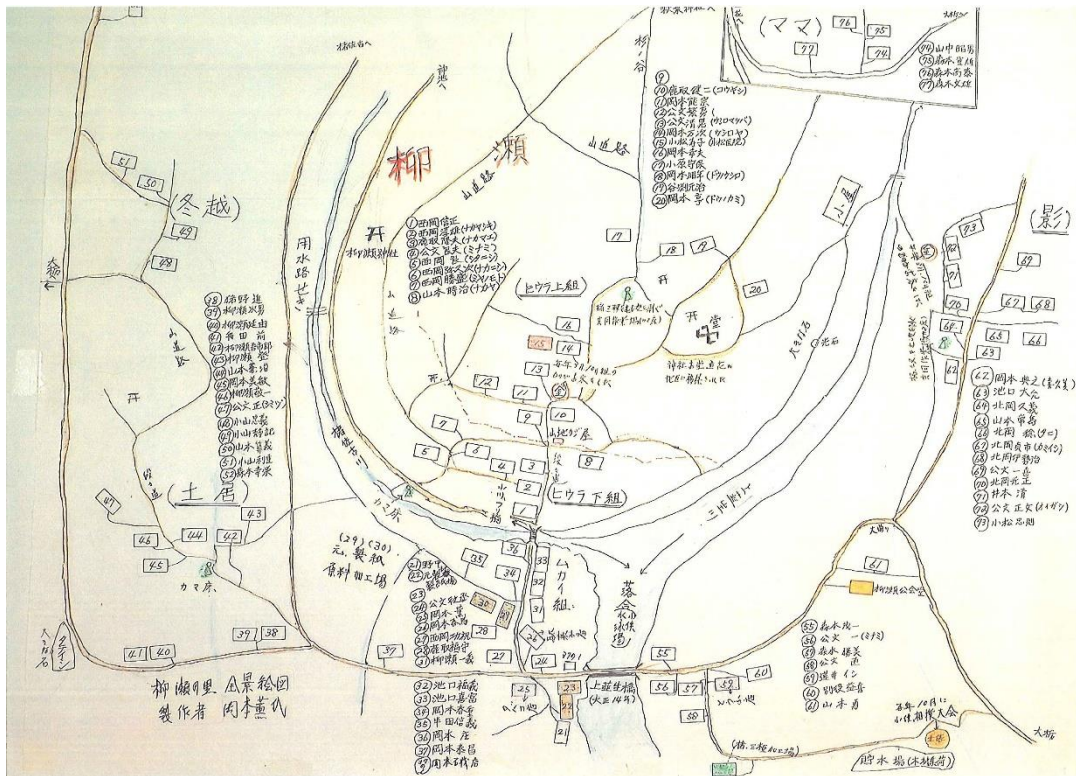
¹⁾ 詳細は楠瀬慶太 2018「土佐山村の屋号研究試論」『高知大國文』49 を参照。屋号地図に登場する集落については、楠瀬慶太 2008『新葦生・槇山風土記—香美市域 120 人に聞いた村の歴史・生活・民俗』花書院に詳しく記している。

²⁾ 楠瀬慶太 2019「地域資源としての地名—消えゆく地名と村落史研究」『地名と風土』13

柳瀬の屋号地図

物部川の洪水・利水対策のため昭和 12 年から始まった永瀬ダム建設によって、戦後消滅した「柳瀬」集落の住民がダムに沈む前の住宅配置を描いた屋号地図。旧物部村大字柳瀬（現香美市）は中世の名主・柳瀬氏の根拠地で、中近世から近代に至る古文書「柳瀬文書」も残る。荘園「大忍庄」の境界地、河川交通の要衝として重要な役割を果たした集落の往古を知る地域資源地図である。地図は、ダム建設による移住で離散した元住民が 1 年に 1 回集まる「柳瀬会」でも昔を振り返る資料として使われ、柳瀬会メンバーと筆者らの共同現地調査でも活躍した。

◎柳瀬の屋号地図



拓・頓定・庄谷相の屋号地図

旧物部村拓（つぶせ）出身の森岡和美氏（香美市香北町美良布）が描いた旧槇山郷の頓定（とんじょう）・拓・庄谷相の3集落の住宅配置を描いた屋号地図。大忍庄の槇山郷の入口にあたる集落で、山や巨木、森、神社、灌漑施設に頼らない天水田など景観の特徴も描かれている。

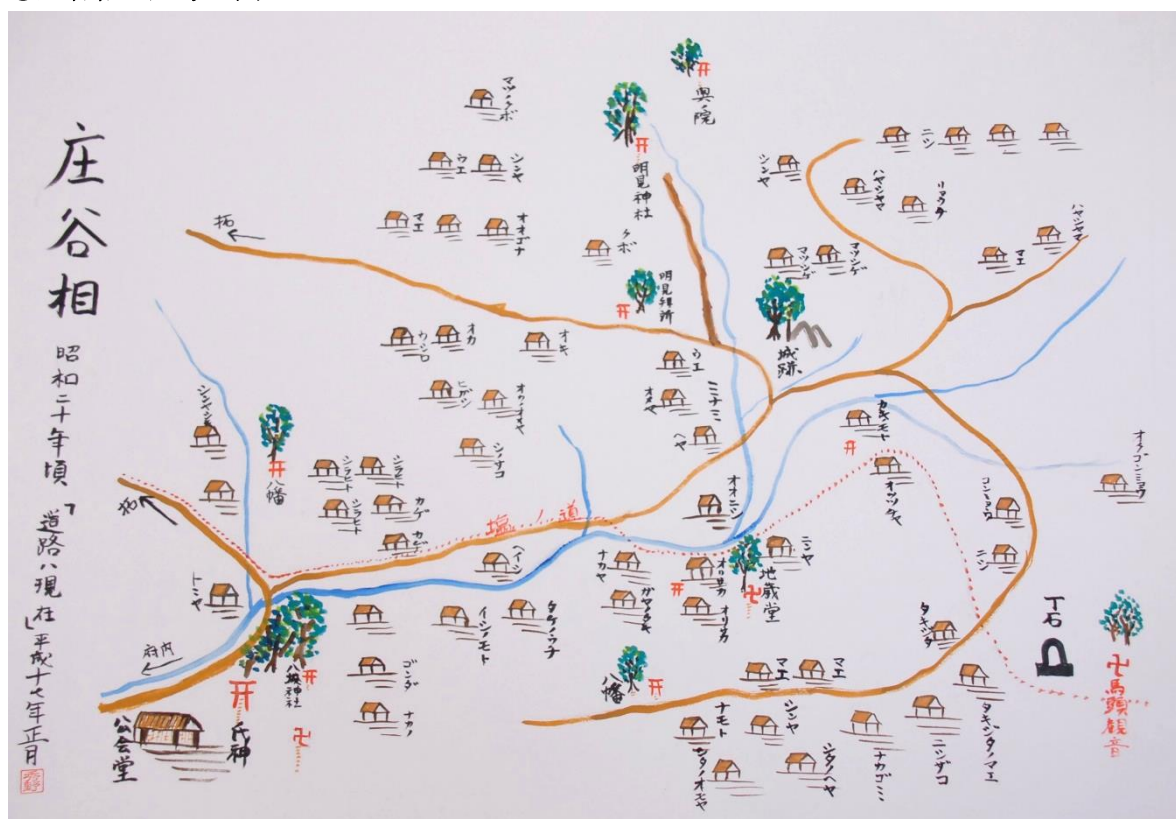
◎拓の屋号地図



◎頼定の屋号地図



◎庄谷相の屋号地図



猿押～神峯 安芸・安田境界の尾根

森下 嘉晴

猿押・河又国有林へ行くたびに、なだらかで形のいい、安芸市と安田町の市町境であり、名村川と安田川の分水嶺となっているこの尾根をいつも気にしながら眺めていた。今春、やっとこの尾根を歩くことが実現したので、この時の出来事などを少し記す。

スタートは境界巡検や林野巡視で歩き慣れた文化財備蓄林である猿押山。民有林境界まではあつという間だ。国有林が終わったところには、その昔この山中に整備された集落を結ぶ往還道の堀切。この道をわらじを履いた人々が馬路～安田～安芸を歩いていたことを想像させてくれる。

過疎化により山中の集落が消滅していても、長い間、人々の交流が営まれ、踏まれ続けてきた山道はところどころにその形を残している。

しばらく進むと、「古田のくぼ」という廃水田跡に出る。今は山に戻っているがこの山中を開き稲を栽培していた人々の暮らしを想い描く。

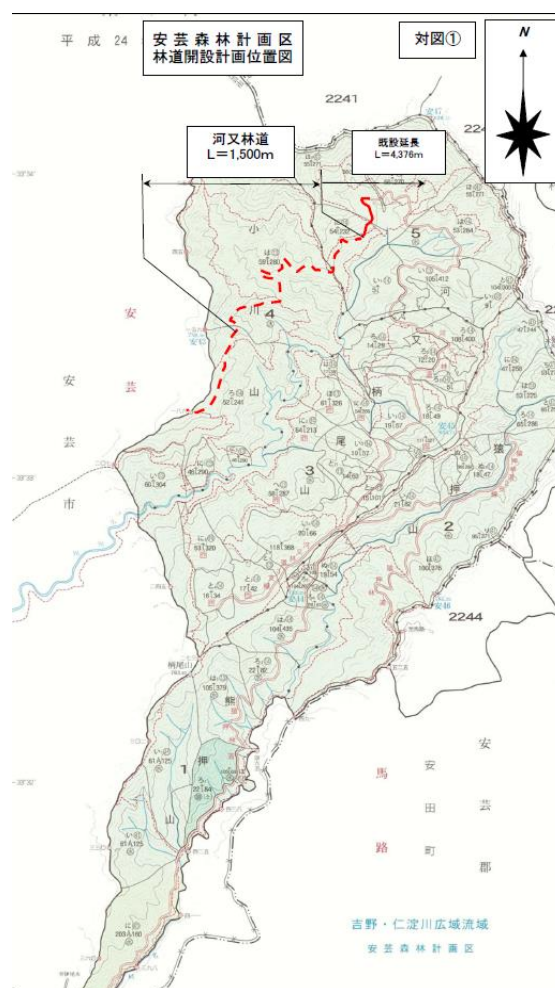
また、名村川を挟むこの尾根の対岸に、今は地図からも消滅した奥栗・三軒家という集落跡がある。この山中に遺跡といってもいいくらいの石垣が施された田畑の跡が植林の中に残り、おそらく平家の落人の時代からひっそりと人目を避けるように暮らしていた人々の痕跡を廃集落となった土地に身を委ねるとなんともいえない感覚に襲われる。

この集落は改めてたんねてみたいと思う。

この山中は見事に全山、ヒノキ・スギの人工林。奥山のため手入れに人が入ることも難儀することだろうが、1年1年、植えられた木々は年輪を重ねて成長している。

地球温暖化防止や災害防止、国土保全、水源のかん養など、森林の持つ公益的機能を高めるために令和 6 年度より森林環境税（一人あたり 1000 円）が導入される。

現在の配分は人口割りで大都市圏に厚く配分されると言われているが、どうかこの血税がほんとうに森林の整備や山で働く人のために、山村・林業の振興につながるように切に願うばかりだ。



猿押・河又国有林の地図

(四国森林管理局『安芸国有林の地域別の森林計画書』所収)

りだ。

鹿の姿や気配も色濃く、鹿に参政権があったらどんな社会になるだろうとか、いろいろなことを考えながら尾根に残るスダジイなど照葉樹の落ち葉を踏んで歩を進めていく。

ところが、安田町は国土調査が行われていることから、安芸と安田の境は判断できると容易に考えていた自分の思い上がり、甘さに後悔した。複雑に尾根が入りくんでおり、尾根立っていないところや変化点で何度も迷い、途方に暮れてしまった。

今回、安芸の山のことは何でも知っている先輩 和泉由喜さんに事前のレクチャーをしてもらい、そして携帯電話で適切にルートアドバイスをしていただいたことで大いに助けてもらった。心から感謝である。

火鉢が印象的だった廃屋跡に出て、難関を抜けると送電線の鉄塔に出る。唯一、眺めのよい場所でここで弁当に持ってきたミートスパゲッティを食べる。長い時間歩くときには炭水化物がエネルギー源。6束分をゆでて作ってきた。満腹で逆流しそうになる。

まもなく2本目の鉄塔を過ぎると旭が丘の柚子畑に出た。ここからしばらく車道を歩きアンテナ群にたどり着く。

目標にしていた「神峯山（空と海の展望台）」を探すどこにも見当たらない。上に下にあちこちさまよっていると、杉垣の家の前にお婆さんがいたので展望台の場所を尋ねると、「展望台は高いけ、すっとわかるわね」と南の方を指を指して教えてくれた。今し方探した場所だったが見えない。また南へ下り茶畑の中を歩くと小さい標識をみつけてやっとたどり着いた。

高さ23m、望遠鏡が2台設置されており名前のとおり太平洋と空を一望できる大展望のスケールが広がっていた。

ここから山道を下り神峯神社へ。立派な銅板葺きで見事な羽目彫刻を施した荘厳な神社に出る。ユニークなのは大砲の砲弾が奉納され飾られているところ。歴史のある石段を下ると大楠・大杉を見上げる。さらに下ると四国霊場札所 神峯寺に出ると先輩の和泉さんと佃さんが来てくれたところだった。

ちょうど桜の季節。参道沿いに植えられた800本という桜並木を下り帰路につく。

